

国際棟の建設について

国際棟建設の経緯についてほとんど記録が残っていないので何か書くように依頼された。

国際棟を企画提案された今市憲作教授は基礎工学部設立の功労者である植松時雄教授の下で基礎工学部機械工学科の設備やカリキュラムの決定に実質的に関与されたため機械工学科の発展に非常に強い思い入れがあった。基礎工学部は工学部に対して特徴を持つ必要があった。今市教授は昭和36年にスタートした学部の設立20年目の節目に当たって、「教育の国際化」を基礎工学部（機械工学科）の特徴にすべきと考えていた。そのためにもまず、「外国人教師招聘制度」を利用して外国の現役教授を招聘して学部生に英語の授業を経験させることにした。講師としては親しくしていたミシガン大学のW. J. Yang教授にお願いして米国のミシガン大学からサバティカル（1年間の休暇制度）の教授を紹介して頂いた。この制度によって昭和55年度（1980年）から4年間に亘って4人の教授を迎えた。講義科目についてはよく覚えていないが、熱伝達、数値計算があったように思う。4人目はミシガン大学からではなかったがその経緯は知らない。

英語教育とは別に小型の国際会議を開くことを考えて会議場の建設を提案した。現在の国際棟という名称はこれを踏まえて名付けられたものと思う。当時、学部建物の一階北側にある図書室が手狭で拡張が望まれていた。図書室の隣には機械工学科の製図室があったがこれもまた手狭だった。新しい製図室の建設と国際会議に使える会議室のために「学部教育の国際化」という名目で学部の南にある空き地に製図室のための新しい建物の建設を提案したようである。

私は当時今市研究室の助教授であり設計演習を担当していたことから新しい設計製図の講義に使う演習室とついでに国際会議用会議室の企画設計を任された。

訪米して技術の成果を実物／実物大レプリカで展示しているフォードミュージアムやNASAのヒューストン基地など観て工学教育では寸法と重量の認識が重要だと感じていた。そこで新しい演習室では、①数百kg程度の重量物を展示できる展示台と搬出入装置、②展示物を観たりにアクセスし易い配置（傾斜の緩い階段教室、幅広の通路）、③広い準備室、④製図や小物をおける広い机、⑤音響効果のよい高い天井などを備えた。その結果、高い天井は保守が面倒、広い面積の割に収容人数が少ない、重量物の展示台は普通の講義・講演では邪魔などの問題点もあった。よく覚えていないが数年後には設計演習は学生の負担が重すぎるということになって設計演習の教育方針が根本的に変わってしまったため、当初の実物を扱う演習室として構想は残念ながら全く生きなかった。この演習室はシグマホールと名付けられて講義や講演会場として使われているらしい。HPを見ると数年前に椅子を並べる形で収容人数を増やすように改装したようだ。

会議室とその周りは国際会議に使うことを意識して寸法と設備を決めた。国際会議では（癖のある）外国語が使われることを考慮して、参加者の席毎にマイクを置き、明瞭に声を聞けるように音の吸収がよいように床には厚めの絨毯を敷いた。学会では参加者が講演時間外に発表内容についていろいろと意見交換するのがふつうであるため、講演室外で数人が集まって話ができるように広い廊下やコーナー（ホイヤー）を作った。人が壁に寄りかかったりポスターなどを掲示するには壁には絵画がないことが望ましいということで、建物の完成時に文系学部の美術評論で著名な先生が寄付した3～4枚の大きな油絵を今市教授がお返ししたことが記憶に残っている。現在は絵画が飾られているらしいのであまり拘ることは無かったようだ。庭園が無いので国際棟の西側の小さな池と周囲の植栽（現在はどうなっているか知らない）を2階の会議室から見下ろせる広いガラス窓を備えた。この豪華な会議室が目的通りに国際会議や国内の学会に使用されたか否かは知らない。

文責 植村 知正（基礎工学部2回生、昭和40年卒業）